九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「我身にたどる姫君」のユーモア

今井，源衛
九州大学文学部名誉教授，梅光女学院大学教授

https://doi.org/10.15017/12039

出版情報：語文研究. 52/53, pp.1-10, 1982-06-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「我身にたどる姫君」のユーモア

今井源衛

私は先に『我身にたどる姫君』の性愛表現[一]について、あるいは、その巻六の成立に関して、多少の考察を試みたが[二]、そのいずれの場合にも当然触れるべくして、果し得なかったことが若干残った感があった。

その尤なるものに、ユーモアの問題がある。従来この作品については、本文の難解の故か、今日まで現代語訳もなく、一般にはその内容についての理解も極めて不十分であり、その文学的鑑賞の域には未だ遠い状態というほかはない。そのため、ユーモアに関する論の如きは、ほとんど見られないといってよい。

一般に王朝の女性の手に成る物語には、概してユーモアが乏しいといわれるが、源氏物語以降になると、この傾向はますます濃化する一方であって、後期物語では、狭衣物語・とりかへばや・堤中納言物語などの各一部分を除いては、ユーモアはほとんど見ることが出来ないのであり、鎌倉期の擬古物語では、描写が痩せ細るのと比例して、心の余裕が生むユーモアは、極度に乏しくなるといってよいだろう。ユーモアはこの時代にはむしろ、軍記物の片隅と、主としては説話集の世界に、かなり品下った形となって姿を見せているのである。

しかるに、この物語では、そうではなく、ユーモアが顕著に盛りこまれている。この作品は、明らかに女性の手になるものであるに拘らず、ユーモラスな傾向を示していることは、その大きな特質であるといってよい。

私は、今それらのユーモアを、便宜上

一、会話
二、古典のパロディ
三、登場人物像
四、語戯

と分けて、論を進めることにする。

一

ユーモラスな会話は、この物語にかなり目立つことである。今、その中の一つを例に挙げることにしよう。巻八、第三段、左大臣（殿の中将）が、我が子の姫君を故式部卿宮邸で見付ける条である。（数洋

字は、金子氏『物語文学の研究』の頁数）

少将　（昔馴染ノ女房）といひしぞ、声すなる。おどろくべけれど、ただ扇を打ち鳴らしたまふに、疑ひなく右の大殿（宮の中将のコト、姫君の母ノ延景殿女御ノ兄デアル）の立ち寄らせ給へると心得て、戸を押し開けたる。

（左大臣）「いと思ひかけず思すべけれど、覚えなき道のたよりに、昔物語もきこえまほしくて」

とのたまふ御けはひの、（右大臣デハ）あらぬに、（少将ハ）いみじうおどろかれて思ひ回せど、三位中将（左大臣ノ昔ノ官デアロウ）などきこえし頃、馴れきこえし御けはひなれば、なほかうまで入らせたまふべしとも思ひ寄らず、いとあやしくて、

（少将）「むげに（私ハ）年ふり侍りけるにや、あやしうたどたどしくて」

と、きこゆるに、うち笑ひて、

（左大臣）「口惜しうも思し忘れにけるかな。『水の白浪』（昔ノ左大臣ノ渾名）とつけたまひしは、いみじく御覚えとこそ思ひしに、むげに名残なくも」（スッカリ忘レラレテシマッタトハネ）

とのたまふに、うち笑ひて

（少将）「思ひ寄る程のことぞ。あなかたはらいた。簀子こそなめげに」

と、騒ぐを、

（左大臣）「さりとて、いづこにか据ゑたまはん。その居所よりは、問ひきこえんこと、すかさで、のたまへよ」

（少将）「身の程に、召し問はるばかりの事こそ思ひたまへられねど、いかでか」

ときこゆ。

（左大臣）「これにおはするは誰ぞ。女御殿は、縹の中に（娘の斎宮ト共ニ初斎院ニ）移ろはせ給ひにし、とこそは聞きしか」

とのたまへば、

（少将）「これには人も侍らず」

ときこゆ。

（左大臣）「これやすかしたまはぬ。その灯の光の見ゆる所に、あは（アレハ？）。おはすめるは（イラッシャルヨウジャナイカ）」

とのたまふに、げにや見えつらんとわびしうて、

（少将）「あれは人住みたまふと聞こゆべきにも侍らず。故斎宮（式部卿宮北方、延景殿女御ノ母）の御叔母にものしたまひし人の、思ひかけずとどめ置きてうせ給ひにし人を、御齢の末にらうたくせさせたまひて、さぶらふ人のつらには心苦しきまで思し召したりし御心掟てを、変らぬさまには侍れど、（女御ハ）わざと数まへ思し召す類ひならねば、これは（初斎院ヘハ連レテユカズニ此処ニ）留めさせたまひて侍る」

ときこゆ。

（左大臣）「幾つばかり（に）おはする人ぞ。まめやかにこの御行方（素姓ノ意）語りたまへ。かの御叔母の昔知るよしありしかば、まことは聞かまほしき事のありて問ひきこゆるぞ」

とのたまふが、わびしうて、

（少将）「いさ、（姫君ハ）わざと初めよりは見ぬ人なれば。幾つにか」

ときこゆ。

（左大臣）「あなうたて。さも顕はるる偽りかな。そこらの年月に（アナタノ）御声も忘れきこえぬは、あはれと思せかし。昔の友は、さばかりならぬだに浅うやはおぼゆる」

とのたまふに、げに明けくれ通ひたまひし世も思ひ出でられて、あはれなり。

(将少)「いさ、(姫君ハ)まだ片なりなる程になん」

ときこゆるを、うち思し合はするに、この御仲(麗景殿女御トノ仲)の絶え初めし頃なるべし。久しき御里居にいみじう悩み給ひしぞかし。思ひ寄らざりけるよ、など思し続くるも、いとあはれなれば、

(臣左大)「さらば、すかしこそし給はめ、また聞こえん事聞きたまひてんや」

(将少)「それもいかが。心の及び侍らん事は、身を捨てても」

ときこゆ。

(臣左大)「その君見せたまへ。斎宮の御叔母の留め置きたらん人、女御殿のわざと思しとどめざらんを、麿に君の見せたまはん、さまで罪重かるべしや」

とのたまふに、うち笑ひて、

(将少)「誰留め置きたりとても、心一つにてはいかがは」

ときこゆ。

(臣左大)「あな憎や。こち寄りたまへ。いとよく知りたるは。いかに、さては女御殿の御姫君」

などのたまふに、

(将少)「かかる御物言ひのまだ変らせたまはざりける。あなうたて。かけても」

ときこゆ。

(臣左大)「憎し。物なのたまひそ。げにめざましき簀子も。御許しあるべきぞかし」

(中略。左大臣は戸を開けて部屋に入り、姫君の顔が女御と自分に似ているのを見て、我子と確認する)

(臣左大)「まことは(マジメナハナシガ)、思ひの外にもの狂ほしき有様、人に漏らしたまふなよ。そこは幾つにかなりたまふ。五十余か」

とのたまへば、いみじう笑ひて、

(将少)「いとよく覚えさせたまふらんものを。昔も常々のたまはせし事を」

ときこゆ。

(臣左大)「女御殿などに、まことはゆめゆめ漏らしきこえ給ふな。もしさもあらば、麿のべ聞こえん、『思ひかけず通りしに、少将の君の引き入れて、女御殿の御娘見よ見よとのたまふ』と言はんよ」

とのたまふ。

(将少)「ただ今あらんことのやうに、けしからず、人もこそ聞き侍れ」

と、わぶるもをかし。

長文の引用で恐縮だが、左大臣と昔馴染の老女房との、冗談の中に嘘やかけ引きを含み、機智に富んだ、海千山千の問答の面白さは格別であろう。会話の間に挿まれた地の文は、極端に短かくなって、「きこゆ」「のたまへば」がくりかえされているのも、余計な説明を省いて、会話の応酬のみで読者を楽しませ、用を足そうとする意図のあらわれとみる事もできよう。近世末期の人情本の会話の形に近いものをすら思わせられるであろう。源氏物語その他の物語にも、長い会話文があるにはあるが、それはそれぞれ一つの言葉が長

いのであって、これほどまで、相互のやりとりが、延々と十三回にも及ぶのは珍しい。それでいて読者を飽きさせない腕も、見事といってよいだろう。

もう一つ例を引こう。巻六、十四段、女帝が近習女房に、お守り匣と扇とを分け与える条である。

次ぎに、典侍(中納言典侍)の方を(女帝ガ)御覧じやれば、それは、

「なほ、いと男のいみじく覚ゆれば」(冗談デアル)

とて平胡簶などの物の具の、えもいはず目もあやなるものあるを取りて、扇の上に置き給へれば、また扇賜はせたる、開けて見給ふに、新宰相の典侍を、

(女帝)「いかに」

と御けしきあれば、御前なる近きをば取らで、中納言の典侍の扇の上なる及び取りて、懐に引き入れたれば

(中納言典侍)「あらねたや、例の、やはらして怖ろしかるらん」と

(新宰相典侍ヲ)さいなめば、

(新宰相典侍)「我とはえ見知らねば(自分ヒトリデハヨシアシノ判断ガツキマセンカラ)」

とてゐたれば、

(中納言典侍)「あはれ、さ思ひつるものを。かかる心したる人を近く据ゑて(損ヲシタ)」

など、　　申したまへば、

(女帝ハ)「さ思ひつるならば、などかさは(ナゼソンナニ油断シテイタノ)」

と笑はせたまふ。

いかにも心の通いあった、女帝を中心とした親しい朋輩どうしの、冗談を交えた楽しい会話となっているではないか。この種の軽妙、洒脱の会話の面白さが、この物語の一つの魅力となっていることは、疑いない。

二

次ぎに触れたいのは、古典のパロディということである。

鎌倉期の物語の文章が、王朝古典の詞句の切継ぎに過ぎないとはよく云われる事である。本作品も、ご多分に漏れず、古今集、源氏物語、伊勢、狭衣など先行作品に材を仰ぐこと甚だ多い。また、その多くは、ごくふつうの模倣踏襲といってさしつかえあるまい。

しかし、その中に、若干、古典を戯画化することで、新味を狙い、ユーモアの効果を挙げているものがある。たとえば、巻六、十二段、斎宮が、源中将という男と深い仲になる条。

大夫の君(女房)、知るゆかりありて、いかが構へけん、源中将とて、いみじう優なる若君だち、語らひつけてけり。①月明き夜参りて、笛吹きならし、歌うたひなどす。②ただ天人の降り来たりたらんやうにて、この頃もて騒がるるはてはては、二度ばかり参りけるに、③いみじう親しう語らひなりける。中将は、それも人なれば、行幸などの空のけしきは、④高きいやしき目の見えぬにもあらねば、例の武⑤蔵野の草の睦しさに進まれし道なれど、いみじくもの憂きを、⑥ひまなきひのくまかはの捲きかくるやうなるに、わびしけれど、情深くゆゑある人にて、人の御程心苦しかりければ、待ちわびぬ程にほのめきけり。

趣旨は、斎宮の床の中のはげしさに、中将がほとほと閉口したというのであるが、①は伊勢物語六十五段に、

この男、人の国より夜毎に来つつ、笛をいと面白く吹きて、声

はをかしうてぞあはれに歌ひける

とあるのを踏まえたもの、②は、いうまでもなく竹取物語などに見える天人の伝説だが、「いみじき天人の天降れるを見たらむやうに」（源氏物語手習）・「変化の者、天人の降り来たるにやとおぼえて」（枕草子、宮に初めて参りたる頃）などの連想があろう。③は、先記の「天人」扱いはしたけれどやはり、源中将は人間に違いないから、という滑稽であり、④は、伊勢物語九三段の、「おふな〳〵思ひはすべしなぞへなく高きいやしき苦しかりけり」に拠っている。また⑤の引歌は、いうでもなく、古今集雑上の読み人しらず「紫の一本ゆゑに武蔵野の原はみながらあはれとぞ見る」がもとで、伊勢物語、源氏物語などに頻用される古歌である。さらに⑥の「ひのくま川」は、古今集二〇、大歌所歌、「ささの隈日のくま川に駒とめてしばし水飼へ影をだに見む」に拠るのであるが、それと「黒熊革」とを掛けているらしい。「熊革の財布」は、近世小話や川柳に顔を出す女陰を連想させるものであり、[10]ここは、その縁で下に「捲きかくる」と云ったのも、「捲き」は、腕で捲くで男女交接を意味する事いうまでもない。

こうして見ると、一見古典の雅語をふんだんに引いて、錦繡を綴ったかに見えながら、実は、逆に卑俗な滑稽を狙ったものである事明らかであり、古今集や伊勢物語のパロディといってよいであろう。

又、この物語には「源氏」「紫の上」、「かぐや姫」、「狭衣の女二の宮」などの先行物語の主人公の名が散見するのであり、竹取、源氏、狭衣などを引いている事はもちろん明らかであるが、その引きかたを見ると、たとえば、「源氏」は、巻六、十八段に、斎宮の女房、中将のことにつき、

中将は、もとより心ざまの憎いけ、もの挑み、推量、長言（なかごと）、讒言（ざむけん）をのみ好みし人の、みめはさまで悪しからで、姿などゆゑゆゑしうもてつけたるを、そのゆゑもなくときめかさせたまひしに、伊勢の男の影形（かた）も見えざりしとき、中臣とて、いふよしなく痴れたりし者の、鼻高く背は低（ひき）なりしが、心をやりて、「言ふべき人は思ほえで」など放ち上げて、吠ゆるやうに詠（なが）めしに、源氏の御ためも口惜しく、（中将ガ）「袖振る事は」など、詠め合はせなどせしに（ｱﾗ P）

伊勢に在住のころ、中将がその地の神人らしい男と恋仲になった次第を叙する文であるが、「云ふべき人は思ほえで」は、「あはれとも云ふべき人は思ほえで身のいたづらになりぬべきかな」（拾遺集恋五、一条摂政、百人一首）であり、「袖振る事は」は、源氏物語紅葉賀、光源氏に贈った藤壺中宮の歌「唐人の袖ふる事は遠けれど立ちゐにつけてあはれとは見き」に拠ったものである。

源氏物語の中で、藤壺からこの歌を贈られた光源氏が、ここでは小男の中将と同列扱いをされたわけで、いかにも残念至極だ、というのである。

又、「紫の上」は、巻六、第二段、斎宮の寵を新参の小宰相に奪われた中将が機嫌を悪くする条に見える。

中将の君、局より来て、障子を引き開けたれば、（斎宮ト小宰相トハ）いと荒らかに這ひ起きて、何となく御顔けしきも変り、つつましきにや、まめだちたまへるを見て、いと強く（障子ヲ）引き立てて、「移れば変る世の中を」と、長やかにうち詠めて、紫の上よりは殊の外にもの荒く、御簾もふたりとうち掛けて、局ざまへ往

ぬ。(381P)

斎宮と小宰相が、添い臥しているところを見つけて、そのまま障子を、ばたんと乱暴に閉めて、中将は立ち去るのだが、そのとき口ずさむ「移れば変る世の中を」は、源氏物語、若菜上で、女三宮降嫁で傷ついた紫の上が歌う「目に近く移れば変る世の中をゆく末遠くたのみけるかな」を引くのである。紫の上ならば、腹が立っても障子を中将のように、手荒く閉めはしないだろうに、との諧謔であり、先の光源氏の場合と同巧異曲である。共に、光源氏や紫上と全く対照的な人物を照らし出す為の皮肉な道具として、それらの歌詞は用いられているといえるだろう。

また、狭衣物語の「女二の宮」は、巻七に所見があり、その十三段、一品宮（皇太后宮）が少年の悲恋帝に犯された後、煩悶の末、断食自殺を覚悟する条に、その心中を叙して、

あらためていとゆゝしう、心憂く恥づかしく、女院（母、我身女院）にいかで見合はせんと、御顔の置き所なく、すこしことといたくおはしましけるにや、（母女院ノ顔ヲタダ）さし仰ぎゐるべき心ちもせさせたまはず。さりとて、かかる事こそありつれとて、狭衣の女二の宮のやうに、汗水にて（母女院ニ）見えきこえんも、事もおろかなることやありけん。恥づかしく心うきを、とにもかくにもいかにせんいかにせんと、思しめしこがるるに。(399P)

とある。狭衣の女二の宮は、大将に入り臥された翌朝、母大宮に、「夜もすがら泣き明かしたまへる御衣のけしきもいとしほどけげにて、ひきかづきたまへる御髪はいたう漏れたる」（狭衣物語巻二）姿を見つけられたのである。この女二宮の姿と今の一品宮のそれとを二重写しにしながら、しかし、一品宮には、これとは別の自殺というした

たかな道を選ばせるのである。さらに、一個所、重ねて、一品宮の心中を叙べて、

さるゆゝしき事（懐妊ヲ指ス）のあらんに、女院などに思ひ歎かせたてまつらんに、常のためしに思す二の宮などのやうにて永らへんよ。ただ死ぬるより外の目安きことはあらじ(405P)

とあり、同様の覚悟が強調される。ぐずぐずとして生き延びた女二の宮は、それとは対照的な強烈な生き方を一品宮に選ばせる為の、道具でしかないのである。これらは必ずしもユーモアの問題でもパロディでもないが、古典利用の方法の類似性に於いて、注意すべきことではあろう。

三

しかし、この作品のユーモアとして、最も目立つものは、登場人物の造型に於けるそれである。源氏物語の末摘花、近江君、源内侍などや、狭衣物語の今姫君など、先行作品にも道化役は不可欠であったし、この作品にも、それは顕著である。

その代表はいうまでもなく、前斎宮であり、その他は、巻六、巻八等に登場する若干の端役女房や男たちである。

もっとも巻六の成立については、従来問題とされている。私はこれを、現在の巻序通りに、作者に依って執筆されたものと考えてさしつかえないと、今のところ考えている。(四)

斎宮という人物の造型は、まことに興味がふかい。この人物のいわば色情症的な異常人である事は、すでに周知であり、私も、その面については、別の論文で述べた事もある。ここでは、そうした面

をなるべく避けて、他の面から述べる事にしたい。

斎宮は嵯峨院の子であるが、母は御匣殿で、既に亡くなっている。父院からはあまり顧みられず、然るべき後見もないままに育って、伊勢の田舎住いの中に、放恣とぜいたくの悪癖が身についたらしく、万事に非常識であり、身勝手である。また、その奇嬌さが育ちにのみ由らないことは、むやみに人を怖がって、たとえば、中将が恨んでいるからといって「怖ぢ嘆き、ともすれば声を立ててひめかせ給ふ」(336P)たり、「御もののけこはきとて、南面の妻戸押し放ちて、草の露しげき庭にふはりと伏しなど」(336P)したり、「御もののけ起りて、おうおうとのみのしらせ給」(336P)うたりするなど、やはり、何か先天的な精神病質を思わせるところである。そして、例の色情症も、もとより、その種のものであろう。巻頭から再三あらわれるレスビアンの情熊も、たしかにただ事ではないし、男持ちの扇を見つけて、むやみにその持主に関心を持ち、口では、「男にのぞかれていたとは怖い」とか「門に錠を下して」とか云いながら、あべこべに、部屋にはそらだきものをたき、心うきうきと、今か今かと男の来訪を待っているなども、たしかに異様といえば異様である。

しかし、それらが、それではそれほど不自然な印象を与えるか、といえば、それは問題なのである。たしかに異様、非常識ではあるが、こうした女性として、決してあり得べからざる情態というわけではない。この種の女性像にやや誇張を加え、典型化してみせれば、かなり自然に、こうした叙述は生れるように思われる。もし、斎宮を狂人と見るならば、狂人の中では、もっとも穏やかな部類に入りそうである。斎宮はまだ、人の言葉を理解する事が出来るし、自らも他と会話を交える事が出来る。ヒステリー症あるいは燥病的ではあるが、分裂病的ではない。狂人と常人とは、程度の差だというが、斎宮もまたその例である。

また斎宮は、勝手極まる世間知らずの女であるが、しかし何処となく憎めない無邪気さがある。気がいいのである。

たとえば、斎宮は小侍従のもとに届いた兄の兵衛佐からの贈物を見て「私の父の嵯峨院も姉の女帝も、こんなふうに私のことをかまってくれたことがない」と愚痴をこぼしては、その品物を手でいじくり回して、羨しがり、その中のいくらかは、自分の物にしてしまう。しかし、欲深なのかといえば、そうではない。彼女は、第七段、例の扇の一件の時、甲斐太夫が、まだ今年は扇を斎宮から支給されていない旨こぼしていると聞くと、「あなふびん、今年いまだとらせざりけるな。持たせてこそ又も落させめ」と云って、事実、甲斐太夫が衣服にも困っている事を聞くと、さっそくそれを支給したようで、「殊の外に、太夫もの良ければ(モウケモノヲシタノデ)」ということになる。また、これは道楽半分にしろ、出入の祈祷僧の衣服に上等のものを調えさせて、「呉服よ呉服よ、ともて騒」ぎ、母の遺産も乏しく父院の面倒見も手薄な中で、女房たちには、「何でも注文があったら、少納言におっしゃい」と、無責任なことを云っては、裁縫係りの老尼を困らせてしまう。決して性悪女や、ケチな女ではない。巻末に近く、斎宮邸前を、人々が「腰礼(こしうや)」をして通り過ぎていると聞くと、大喜びで、女房たちに、わざわざその真似をさせて見ている。だから伯母の大納言の尼が、斎宮を見限って、品物を持って邸から出ていっても、その悪口をいうのは、斎宮ではなく、周囲の大弐を筆頭とする口さがない女房連中である。まただから、中将が機嫌を悪くすると、主人として叱りつけるどころか、恐がってば

かりいる。釘を七本も打って、呪詛をしたことが明白になってからあとも、怖がるだけで、邸から追出したふうには見えない。胸が圧えられるように痛んだのは斎宮自身だから、中将は斎宮の人形を作って、それに釘を打ったに相違ない、にも拘らず、である。

小宰相が邸を出るときにも、斎宮は、無理矢理に引き止める事はしなかったけれど、とてもつらかったので、「常に見ざらんことを、手引きよせて、泣きかけなどして、許し」(八・424P)たのであった。小宰相がその後も、斎宮をしばしば訪れたり、何かと贈物をするのも、小宰相本人の人がらの良さもあるが、こうした斎宮の無邪気でお人よしのところが、放っておけない気持にさせるためではなかろうか。裁縫に追い立てられた少納言の尼が、そんな目にあっていても、斎宮の幼時に乳母の代理で授乳した時の可愛らしかった思い出のために、今もって、見捨てられないで、「いたはしげに思ひきこえ」(338P)ているのと通ずる、憐憫と同情の心理であろう。

また、女帝が斎宮に同情して、暖い配慮を加えると、斎宮は有頂天になって喜び、聖旨を伝えた勅使の来訪を記念して、「勅旨の間」を設けたという。それもむしろ快い話として受取れるだろう。

斎宮はたしかに道化役であり、愚かで滑稽そのものであるが、しかし、彼女は、単なる唾棄すべき不愉快な人物ではないらしい。右のような、好ましさの半面を暗に注意ぶかく附け加えていることが、この人物の救いとなっており、またその人間像には、必ずしも頽廃とか奇矯の語を以て片附けきれないものを含んでいるように思う。むしろ、こうした二面的で複雑な造型こそが、斎宮像にリアリティを与え、読者を納得させるものとなっている事に注意しなければなるまい。

巻六には、斎宮のほかにも滑稽な人物が多い。斎宮の女房の中将・大弐・新大夫などそれぞれ個性の相違はありながら、滑稽な人物である事を免れず、中将は前述の如く、嫉妬のために物の怪となるような人物であり、大弐は、出しゃばりでおせっかいな、図々しい中年女。新大夫は、主人のごきげん取りに汲々としている若女房で、すこし智恵が足らないために、男運に恵まれない。また女帝付きの女房の中にも、いつも人の口真似をして喜んでいる三笠野がいる。また女房以外では、斎宮に仕えていた遠仲は、酒以外には無欲な男で、のんきに細工物などを作っているが、扇(「蚊払ひ」の呼び方が面白い)の件など巧まざるユーモアがある。その後日譚に、彼は、兵衛佐の斡旋で信濃権守まで昇進したが、昔関係した伊勢の女が、必要あって彼のことを思い出し、押掛け女房でやって来ると、とうとう素姓も知れない連れ子の父親にされてしまう。これもなんとも間が抜けていて、楽しい。

次ぎに、好色者の宮の中将(右大臣)も、後涼殿女御、一品宮、女帝らにつぎつぎ恋慕しながら成功せず、悶々とした揚句に、

心よりほかに永らへ給へれど、ただ昔の中将の御住居ながら、夜としなれば、月にのみあくがれ、昼は物も言はぬ文机ばかりに向ひて、うち眠りつつ明かし暮し給ふ。(七・389P)

とある。右大臣にしては、誇張が過ぎる感は否めないが、一種のとぼけた味がおもしろい。

四

また、この作品には、言葉遊びともいうべきものがかなり見受け

られる事も、見落せないであろう。その一つの方法は、一旦先に記した語句を受けて、後に諧謔的表現を試みることである。

巻七には、冒頭部から、小宰相と斎宮との女の同性愛が露骨に描き出されて、「息もせざらんと見ゆる程に、頸を抱きてぞ臥したる」(350P)とあり、「頸を抱きて」が印象的な文字なのであるが、それを受けて、十一段では、

宰相の君は、暑きに頸も痛く、物なども安らかにもえ喰はず、御箸にて(斎宮ガ)くくめなどせらるれば、痩せたくわびしきに、(366P)

とあって、思わず読者をふき出させる。また同十七段で、近習女房の事を記し、勅勘が解けた後の丹波内侍のかいがいしい姿を

今日よりぞ声も容貌も出で来て、女官呼びて台盤の上拭はせ、先先も語らひつけたる女嬬に、「南殿めでたく掃け」と、言ひ知らせ、唐衣とらせ、主殿の官人の朝潔め心に入れたるに(371P)

とあったが、第六巻巻末、死後の兜率天での日常にも、

今も髪上姿まして清げにて、如意殿掃き廻りて、主殿の官人、女官、女嬬までも捨てず、尋ね求め導き給ひけりとなむ、

とあって、右の文とぴったりと照応させ、落語のオトシのような滑稽な結末を示している。これは、先述の古典のパロディ化と一脈通ずる方法というべきであろうか。

また、巻六、六段に、兵衛佐が妹の小宰相を訪ねて来て、御簾の下からのぞくと、「二重織物のいたく花やかなる紅梅などの見ゆる」(356P)ので、そのまま閉口して立帰り、それ以後は文だけをよこした、とある。二重織物は、豪華な衣裳で斎宮の召料であり、斎宮と、小宰相とが重なり合っていたものか。それを受けて、巻六巻末には、兵衛佐は、

二重織物は怖ろしうて、学問をのみ夜昼しければ、いみじうまめなる公人にて、

立身したとある。それも巧妙な照応であるが、滑稽の効果も大である。この事は、むしろ、小道具を巧みに使う作者の構想力の卓越を示す材料かもしれないが、それらの照応が、常にユーモアを伴なっている事は、見落せないであろう。

同様、第六巻の結末の部分に、あの性悪な女房中将の最期を伝えて、

中将の君は俄かに悩みければ、肥え車(心)求めて、樋洗(ひすまし)が家(七)へ出でいきにけり。あつち死にとかや、うたてげにて、日の見やうなど恐ろしくてぞ死にける、

という。

この第六巻の人々の後日談から、引続く兜率天の歌会のことが、作者にとって、どのような発想の下に生れたものであるかは、これらによってもおおよそ察せられるのではあるまいか。それらを、何か、作者が大まじめに、人々の最後や、後世安楽の姿を仏教信仰のままに読者に伝えようとしたものとは受け取れない。多少は、そういう意味もあったかもしれないけれど、それよりもむしろ、この種の諧謔が眼目であろう。

巻六では、女帝が死後に備えて、近習女房たちに遺言し、死去したあと、斎宮、中将、小宰相、新太夫、遠仲の話が続き、さらにこの中将の最期が伝えられ、それに次いで、兜率天の歌会が続くわけであるが、およそそれらの中に、諧謔の気が皆無のものは一つとしてない。すべて何がしか、滑稽なのである。歌会もまたなかばは、

戯れに過ぎまい。その十一首の和歌はともかくも、右近の内侍が「光をささと放ちて、舞ひ遊び合はれける」とは無邪気な文であり、それに次ぐ、「丹波天人」も、右の通りである。第六巻は、巻頭から滑稽に始まり、滑稽に終る。要するに当時の言葉でいわゆる誹諧の巻といえるであろう。

この物語のユーモアについては、なおこの外に、当時のあるいは俗語かと思われる「くしめく」「ててくる」「ひめく」「鼻脇」「いしいし」「きり者」「むつく」「目弱」「不覚げ」などの用語、あるいは、斎宮が頻りに用いる同語反復、たとえば「呉服よ呉服よ」の如きについても考えるべきであろうが、それ等については他日を期したい。

〔注〕

(一) 拙稿「『我身にたどる姫君』の性愛表現について」文学　昭和五七年二月
(二) 拙稿「『我身にたどる姫君』巻六の成立について」南波浩教授古稀記念刊行『王朝物語とその周辺』所収（昭和五七年九月刊行予定）
(三) 「聞き上手」（安永二年刊）。
「熊の革見て女房の義理をいひ」（川柳、宝暦十三年）。
(四) 前記(二)拙稿。
(五) 前記(一)拙稿。
(六) 「肥え車」は、諸本「こし車」であるが、輿車では下文に通じないので、改訂した。「肥え車」の語は、水蛙眼目に見える。
(七) 「ひすましか家へ」は、金子本「ひすましかいつゝ」。・尊経閣本「かいゑへ」・書陵部本「いへゝ」。今、改訂した。